

写真展「ひょうごの祭り暮らし」

期間: 令和4年4月11日(月)～5月27日(金) 土・日・祝日、5月2日(月)・6日(金)休室

時間: 午前10時～午後5時 場所: 神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

新年度はじめの展示は、昨年度にセンター開設20周年を記念して神戸市立須磨離宮公園で季節ごとに開催した展示から、写真展「ひょうごの祭り暮らし」の内容を構成をかえて再展示します。

I 「ひょうごの祭り」は、県内各地の「鬼」や「翁」の芸能、「上鴨川住吉神社の神事舞」・「篠山波々伯部神社のおやまの神事」に、「北条節句祭」を加えています。II 「ひょうごの暮らし」では、村々や家々の行事を紹介します。写真は、民俗研究者の喜多慶治氏と西谷勝也氏の調査資料を中心に、古典芸能研究センター契約カメラマンの故 真淵紳一氏による記録もあわせて展示します。

ゆたかで多様な兵庫五国の、神仏と日々の暮らしにかかわる行事の様子や、昭和三十年代から四十年代はじめの景観をお楽しみください。

〔展示写真〕

I ひょうごの祭り ～寺社の祭礼と民俗芸能～

1. 鬼の芸能

鬼の芸能の多くは、追儺^{ついな}の行事に源を発している。追儺は本来、12月31日の大祓^{おおほらえ}に続いて行われ、疫鬼(疫病神)を払う儀礼だった。しかし、平安期の寺社では、修正会(正月の法会)の結願日に三人の鬼を竜天・毘沙門天が追い、堂外の群集がつぶてを放つという形になっていた。この形はやがて廃れ、室町時代には、民間で鬼やらいとして行われていた節分の豆撒きと結びつくようになった。

古式をとどめる長田神社の追儺式は、室町時代には現在の形で行われていたらしい。7匹の鬼が松明と太刀で邪気を払って一年の無病息災を願うものとされる。最後には「影の餅」(一年をあらわす12個の餅)を鬼が割って、祓い清める。

神戸市および周辺地域の追儺式における鬼については、複数の親鬼の踊りが、子鬼の踊りをはさんで数回繰り返されるという形が多いのが特徴である。親鬼は片手に松明を、片手に斧・槌・槍などを持つ。クライマックスは「餅割り」で、鏡餅を手に持った採り物で突く。

- 1-1 鶴林寺鬼追 加古川市加古川町 昭和37(1962)年1月8日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-2 太山寺追儺式 太郎鬼 神戸市西区伊川谷町 昭和35(1960)年1月7日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-3 長田神社古式追儺式 神戸市長田区長田 昭和34(1959)年2月3日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-4 妙法寺鬼踊り 次郎鬼 神戸市須磨区妙法寺 昭和36(1961)年1月3日 喜多慶治撮影(喜多文庫)
- 1-5 円教寺修正会鬼追 赤鬼 姫路市書写 昭和40(1965)年1月18日 西谷勝也撮影
- 1-6 朝光寺鬼追踊 加東市畑 昭和42(1967)年5月2日 喜多慶治撮影(喜多文庫)

2. 翁の芸能

「翁」(翁猿楽、式三番)は能の成立以前から寺社で行われてきた祝^{しゆくとう}禱芸で、能楽の源流の一つとされている。現在の「翁」は千歳・翁^{せんざい}・三番叟^{さんぼそう}の3人の舞によって構成されているが、南北朝期以前には父尉^{ちちのじょう}と延命冠者^{えんめいかじや}を加えた5人が舞っていた。父尉が登場する「車大歳神社の翁舞」は、こうした古態の一部をとどめていると考えられている。これは翁猿楽成立当初から「翁」を専門としてきた芸能者(=長あるいは年預とも)が近世に伝えたものらしい。

神戸市内の長田神社・湊川神社・生田神社では、正月に「御面式」「お面掛け」などと呼ばれる簡略形の「翁」が奉納されている。これは、地謡と面箱持ちを伴った翁が一人で舞うもので、囃子方は登場しない。

一方、姫路市・高砂市など播磨地方には、別系統の「お面掛け」が秋祭に奉納されている。姫路藩のお抱え能役者が近隣の神社に奉納していたもので、それが現在もその弟子筋系統の人々によって伝えられているという。こちらは囃子方も地謡もなく、翁が一人で謡いながら舞う。

- 2-1 車大歳神社翁舞 父尉 神戸市須磨区車 昭和47 (1972) 年1月14日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)
- 2-2 車大歳神社翁舞 翁 神戸市須磨区車 平成13 (2001) 年1月14日 小林英一撮影
- 2-3 車大歳神社翁舞 三番叟 (鈴の段) 神戸市須磨区車 平成13 (2001) 年1月14日 小林英一撮影
- 2-4 長田神社翁御面掛式 神戸市長田区长田 平成13 (2001) 年1月10日 小林英一撮影
- 2-5 曾根天満神社お面掛の神事 高砂市曾根 平成6 (1994) 年10月14日 小林英一撮影

3. 「上鴨川住吉神社の神事舞」 加東市上鴨川 住吉神社 祭名：住吉神社秋祭 祭礼日：10月5日 (本祭)

平安期の祭礼図などをのせる『年中行事絵巻』には、田楽・獅子舞・王の舞などの行列が描かれている。これらは中世祭礼芸能の典型的な構成といえるもので、上鴨川住吉神社の神事舞には今もかたちをとどめている。

4日夜の神事を「宵宮」、5日の神事(本祭)を「昼宮」と呼び、村の若い衆が神事舞を舞う。宵宮では、素袍姿の若い衆たちの盃事のあと、拝殿で神楽が奉納される。続いて「リオンサンの舞」「獅子舞」「田楽」「イリマイ(扇の舞)」といった芸能(「ゴホントウ」)が次々と演じられる。翌日の昼宮は、宵宮と同じく「リオンサンの舞」「田楽」などが舞われた後、「いど」「万歳楽」「六ぶん」「翁」「宝物」「冠者」「父尉」から成る翁舞が奉納される。この祭礼は、現在は毎年10月の第一土・日曜日に行われているが、上鴨川地区の宮座(氏子中の長男のみで構成される)によって厳格に伝承されていることは特筆すべきだろう。昭和52年、国指定重要無形民俗文化財に指定された。

- 3-1 宵宮 リオンサンの舞 昭和35 (1960) 年10月4日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)
- 3-2 宵宮 獅子 昭和35 (1955) 年10月4日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)
- 3-3 本祭 田楽躍 昭和35 (1960) 年10月5日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)
- 3-4 本祭 高足 昭和35 (1960) 年10月5日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)
- 3-5 本祭 翁舞(延命冠者) 昭和35 (1960) 年10月5日 西谷勝也撮影
- 3-6 本祭 翁舞(父尉) 昭和35 (1960) 年10月5日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)

4. 「^{ほうかべ}波々伯部神社のおやまの神事」 丹波篠山市宮ノ前 祭名：波々伯部神社祇園祭 祭礼日：8月5日 (本来は旧暦6月14日)

波々伯部神社の祇園祭では、ダンジリヤマという四輪一層吹き抜け型の囃子屋台と、キウリヤマ(胡瓜山)という脇障子付きの船形屋台の2種類の曳山が奉納される。境内に建てられた東西2つのキウリヤマの上では、デコノボウと呼ばれる素朴な人形操りが演じられる。演目は「高砂」「道成寺」「愛宕山」「田原藤太」などで、胴串のみの非常に単純な形の人形を使う。この人形は、福岡県の古表神社の傀儡子人形などととも、古い人形操りの形態を残すものとして注目されている。平成17年、「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の指定を受けた(名称「^{ほうかべ}波々伯部神社のおやま行事」)。

西谷勝也氏は昭和34年・35年・36年に調査に赴いており、その結実である論文「丹波国波々伯部神社の造山の神事と人形操り」(『日本民俗学』22号、1961年)はこの祭りの先駆的研究と位置づけられている。喜多慶治氏は、現地を訪れた際、西谷氏の写真(昭和35年)を見て複写を依頼した(『兵庫民俗芸能誌』第114図)。人形操りは毎年行われるわけではなく、喜多氏は人形は調査のみで実演は未見と記している。

- 4-1 人形操りの人形(デコノボウ) 昭和46 (1971) 年8月2日 喜多慶治撮影 (喜多文庫)
- 4-2 境内に建てられた山(胡瓜山) 昭和35 (1960) 年8月2日 西谷勝也撮影
- 4-3 東山の人形「氷室」 昭和34 (1959) 年8月5日 西谷勝也撮影
- 4-4 山の上で人形をまわす 昭和35 (1960) 年8月5日 西谷勝也撮影

5. 「北条節句祭」加西市北条町北条

祭名：住吉神社春季例祭

祭礼日：4月3日（本祭）

4月2日・3日（*現在は毎年4月第一土・日曜日）の住吉神社節句祭は、播磨地域の春祭りの先駆けで、東郷・西郷2基の神輿渡御（本社から御旅所へ）、14台の屋台宮入（本社・御旅所）と巡行、龍王舞、鶏合などが行われる。

龍王舞は王の舞とも言われ、福井に多く残り、滋賀・京都・兵庫にもいくつか残っている民俗芸能である（前掲3「上鴨川住吉神社」のリョンスンの舞も同類）。この龍王舞の舞手も鼻高の面を付け、鳥兜を被り、矛を手にして登場し、御旅所と住吉神社境内（神輿の還御後）で舞の奉納を行う。住吉神社の龍王舞は、東郷は栗田、西郷は小谷地区で担当する。舞は、方固め、矛の舞、素手で大きな身振りを見せる舞で、東郷と西郷はどちらも同じ舞だが、御旅所では東郷が先に、本社では西郷から順に演じるのが決まりになっている。

- 5-1 屋台の宮入り（本社） 昭和46（1971）年4月2日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 5-2 御旅所での龍王舞（東郷） 昭和39（1964）年4月3日 西谷勝也撮影
- 5-3 御旅所での龍王舞（西郷） 昭和47（1972）年4月3日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 5-4 龍王舞のお囃子 手前は締太鼓、奥に笛を吹く人の姿が見える 昭和39（1964）年4月3日 西谷勝也撮影
- 5-5 御旅所から本社へ向かう屋台 昭和35（1960）年4月3日 西谷勝也撮影
- 5-6 本社での龍王舞 昭和46（1971）年4月3日 喜多慶治撮影（喜多文庫）
- 5-7 鶏合 昭和37（1962）年4月3日 西谷勝也撮影
- 5-8 屋台の揃った御旅所へ一行が入場 平成21（2009）年4月5日 真淵紳一撮影
- 5-9 御旅所での龍王舞（東郷） 平成21（2009）年4月5日 真淵紳一撮影
- 5-10 御旅所での龍王舞（東郷） 素手の舞 平成21（2009）年4月5日 真淵紳一撮影

II ひょうごの暮らし ～日々の生活にみる年中行事～

6. 村々の行事

かつて、一年の農事暦は村の暦でもあった。年頭にはハナフリ・オコナイなどと呼ばれる儀式がどこの村でも執り行われる。供え物には、重く実った稲穂のシンボルでもあるモチバナなどが登場した。

村の正月は行事が多い。「マト」と呼ばれる、魔を払う弓矢の行事。小正月の「キツネガリ（キツネガエリ）」では子どもたちが災厄を村から追い出す。夏の「虫送り」も子どもたちが稲の害虫を村外へ送り出す儀式だった。盆の火祭りにも子どもたちが活躍する。稲作が中心となる生活においては、大人も子どもも、秋の豊かな実りを願って真摯に祈る機会が幾度となくあった。

村の年中行事を担う組織はオトウと呼ばれ、村の氏神さまを一年間守り、年中行事や祭りの中心となるトウニンは重要な役割を果たした。現在は急速に消えつつある各地のトウニンの姿が、西谷氏の写真の中にはあちこちに見られる。

- 6-1 ハナフリ 神戸市西区押部谷町栄 昭和40（1965）年1月4日 西谷勝也撮影
- 6-2 マト 丹波篠山市今田町木津 昭和37（1962）年1月2日 西谷勝也撮影
- 6-3 キツネガリ（キツネガエリ） 神崎郡神河町 昭和34（1959）年1月14日 西谷勝也撮影
- 6-4 コト（コトノハシ） 朝来市多々良木 昭和33（1958）年5月5日 西谷勝也撮影
- 6-5 ノボリマワシ 豊岡市出石町 出石神社 昭和40（1965）年5月5日 西谷勝也撮影
- 6-6 夏越の祓い 姫路市大塩町 大塩天満宮 昭和42（1967）年6月30日 西谷勝也撮影
- 6-7 虫送り 多可郡多可町 昭和35（1960）年7月18日 西谷勝也撮影
- 6-8 愛宕火 丹波篠山市古市 昭和36（1961）年8月24日 西谷勝也撮影

7. 家々の行事

新年になると年神は、門先に立てられた門松を依代として家々を訪れる。年神の姿は土地によってさまざまで、ヤマドッサンはその代表的なものだった。家々の土間には、田の神であるジガミが祀られ、ジマツリが行

われる。田の神が働きに出る日は春亥の子を、収穫を終えて山へ帰る日には秋亥の子を祝う。豊かな実りを感じ謝し稲の刈り上げを祝う行事カリゴメは、素朴ながら厳粛さを伴うものだった。

苗代田で行われる水口祭では、季節の花がハナとして立てられる。田植え初めを祝うサビラキには、水口に粟などの実のなる木を立て、タマツリにもシバを差し立てる。ショウブやヨモギで邪気を払う五月節句や、笹飾りに願いを托す七夕。四季折々の自然が、家々の行事には欠かせない。盆になると、懐かしい先祖の霊を迎え共に過ごし、そして送る大切な行事がある。西谷氏の写真からは、家々に祀られ、人々とともにあった神々の姿や、巡る季節の中での人々の稲作への思いが感じられる。

- 7-1 新年を祝って家の門口に松を立てる 淡路市浦 昭和30 (1955) 年12月31日 西谷勝也撮影
- 7-2 ヤマドッサンを祀る 淡路市野島轟木 昭和41 (1966) 年 西谷勝也撮影
- 7-3 ヤマドッサンを祀る 淡路市舟木 昭和30 (1955) 年1月9日 西谷勝也撮影
- 7-4 ヤマドッサンを祀る 淡路市野島 昭和27 (1952) 年1月18日 西谷勝也撮影
- 7-5 水口祭り 加古川市加古川町 昭和34 (1959) 年5月12日 西谷勝也撮影
- 7-6 盆行事(精霊送り) 高砂市米田町 昭和42 (1967) 年8月15日 西谷勝也撮影
- 7-7 カリゴメ 三木市吉川町 昭和30 (1955) 年11月20日 西谷勝也撮影
- 7-8 秋亥の子の供え物 三木市吉川町 昭和30 (1955) 年11月20日 西谷勝也撮影

Ⅲ ひょうごの風景 (西谷勝也氏撮影写真によるスライドショー)

スライドショー写真より

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| a 共同の井戸 姫路市家島町坊勢 1954年 | b 囲炉裏端 佐用郡佐用町大畑 1954年 |
| c 茅で屋根を葺く 神戸市北区有野 1956年 | d 糸つむぎ 三木市吉川町 1957年 |
| e 棚田 淡路市中持 1960年 | f 民家 養父郡糸井村(現 朝来市和田山町) 1956年 |
| g 丹波篠山市の古市の町並み 1961年 | h 漁村の風景 淡路市岩屋 1959年 |

真淵紳一氏撮影の記録写真 (5-08~10以外)

朝光寺鬼追踊 加東市畑 平成17 (2005) 年5月5日

- ①翁面をつけた住吉明神の祓いの踊り
- ②赤鬼が翁から大松明を受け取り踊る
- ③4匹の鬼(赤・青・黒・小豆)が登場して踊る *黒鬼は斧、青鬼は剣、小豆鬼は錫杖を持つ
- ④青鬼が、餅を吊った柵に近づき、斧で餅を打つ
- ⑤赤鬼が灯明で餅を焼く
- ⑥世話人が焼けた餅を手でちぎってわかる

鶴林寺鬼追 加古川市加古川町 平成18 (2006) 年1月8日

- ⑦穂草(細竹を赤く塗り、その先に山吹の芯をつけたもの)の垂れ具合で、その年の豊凶を占う
- ⑧青鬼は木製の鉾を持って登場する
- ⑨赤鬼と青鬼は須弥壇の廻りを巡る
- ⑩赤鬼が外陣の見物客をおどす
- ⑪鬼追いの後、餅まきが行われる
- ⑫牛王宝印を額へ授けてもらう

〔主要参考文献〕

喜多慶治『兵庫県民俗芸能誌』(錦正社、1977年)

西谷勝也『季節の神々』(慶友社、1986年)

小栗栖健治・久下正史編『ふるさとの原像 一兵庫の民俗写真集一』(神戸新聞総合出版センター、2012年)

人物紹介：喜多慶治と西谷勝也

喜多慶治（1901～1992）氏

明治34（1901）年、大阪市生まれ。東京商科大学（現 一橋大学）卒業後、実業界に入る。会社の第一線を退いてから、民俗学の方面に情熱を注ぎ、各地に民俗芸能をつぶさに見てまわり、詳細な記録をとるようになった。平成4（1992）年没。

喜多氏の調査は全国に及ぶが、兵庫県に関する成果は、大著『兵庫県民俗芸能誌』（錦正社、1977年）に集約されている。ここに収録された民俗芸能はすべて喜多氏が実態調査をおこなったもので、きわめて資料価値が高いと学界で評価されている。同書は昭和61年度の第8回神戸史学会賞を受賞した。

昭和33（1958）年から平成3（1991）年9月に至るフィールドワークの記録は、現在、古典芸能研究センターのホームページで「喜多文庫民俗芸能資料データベース」として公開されている（下記参照）。

神戸女子大学古典芸能研究センターホームページ
<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/>



西谷勝也（1906～1969）氏

明治39（1906）年高砂市生まれ。大谷大学文学部人文学科卒業。昭和21（1946）年から加古川西高校教諭、昭和39（1964）年から白陵高校教諭。かたわら淡路、播磨、但馬をはじめ紀州路などを歩き、民俗学の資料を収集、特に農村の祭を調査した。昭和30（1955）年に日本民俗学会評議員に就任、昭和44（1969）年に『季節の神々』で第8回柳田國男賞受賞。昭和44（1969）年没。

〔著書・論文〕

『季節の神々』（慶友社 1986年）、『伝説の兵庫県』（のじぎく文庫 1961年、神戸新聞総合出版センター 2000年）、論文には「丹波国波々伯部神社の造山神事と人形操り」（『日本民俗学』22号 1961年）など。

*小栗栖健治・久下正史編『ふるさとの原像—兵庫の民俗写真集—』（神戸新聞総合出版センター、2012年）より

〔「ひょうごの暮らし」展示解説の用語〕

ハナフリ…年頭にその年の豊作を祈る行事。ハナ（青々とした葉のついたサカキやシキミの枝）を稲に見立てて振ったり打ちつけたりして、豊かな実りを祈願する。

マト…弓で的を射て悪鬼邪霊を払い、豊作を祈る行事。新年に神社を中心として行われる。

キツネガリ（キツネガエリ）…小正月の行事で、但馬・丹波・播磨北部に多い。1月14日夜もしくは15日早朝に、御幣を持った子どもたちが、唱え言を歌いながら家々を廻り、その御幣を村境に立てて歩く。正月の神送りであり、村の一年間の安全を願う村祈祷のお祓いとされる（西谷勝也『季節の神々』参照）。

コト…正月が過ぎてから4月までの間に、雨や雪で戸外で働けない日に近所が集まって餅をつき、ともに飲食する行事。但馬を中心に丹波・播磨北部に多く見られる。本来は、農作の神である一本足のコトの神様を祀る行事だったらしい。コトのために特別に作られる箸をコトノハシと呼んだ。使い終わった箸を藁で編み、片足の草履や杵とともに道端や川端の木にぶら下げた。

ノボリマワシ…5月5日豊岡市の出石神社で行われる端午の節句の行事。初節句の子どもを祝福する。

夏越しの祓…6月30日の神事。夏の終りに半年間の穢れを祓い、残り半年を無事に過ごせるように祈る。

虫送り…稲作の大敵であった害虫を、子どもたちが村の外へ送り出す行事。子どもたちは、麦わらの馬に乗ったサネモリ人形を先頭に村の中を練り歩く。サネモリとは平家の武将斎藤実盛。実盛は稲株につまずいて敵に討たれ、それを恨んで稲の害虫になったと伝えられている。

愛宕火…地藏盆が行われる8月24日は、火伏せの神である愛宕の祭りの日でもあり、この日は各地で愛宕さんに火を捧げる祭りが行われる。

トウニン…村人たちから成る、社寺の神事や法要を担う組織は一般に「座」と呼ばれるが、兵庫県では「オトウ（御頭）」と呼ぶ例が多い。その中で、その年の神事や法要を中心になって担う人を「トウニン（頭人）」、あるいは「トウヤ（頭屋）」という。

秋亥の子…旧暦10月の主に初亥の日に行われる行事で、猪の多産にちなみ子孫繁栄や豊作を祈る。

カドマツ…新年を祝って家の門口に立てる松。本来は正月に訪れる年神の依代^{よりしろ}として設けられたものとされ、正月様と呼ばれることも多い。門松の根元に結われた割木はトシギ・サイギなどと呼ばれ、新年に焚く薪、年木の意を持つ。

ヤマドッサン…淡路島北部で正月に祀られる、山と里とを往き来する作り神、農耕神。鍬に着せた蓑と笠がご神体とされる。この神は醜いので夜遅く来るとも伝えられる。家の裏山から訪れるといい、屋内のジノカミ（地の神）の下やオモテの間に祀られた。またヤマドッサンは爺婆、夫婦の二神といい、供物の膳は2客供える。

水口祭り…種粃を苗代に撒いた時に行う稲作儀礼で、4月中旬から5月初旬にかけて行われた。苗代田の水口に土を盛ったり芝を置いたりして、山から採ってきた季節の花や木の枝、正月に村の寺社で授かったゴウヅエ（牛王杖）などを立てて祀る。一般には苗代祝いなどと呼ばれる。

盆と精霊送り 盆は仏教の盂蘭盆の略といわれ、死者供養の仏教色が強いが、村々の民俗には、古い祖霊信仰の面影が残る。先祖の霊は、7月13日、あるいは月遅れの8月13日に迎えられ、15日夕から16日早朝にかけて送られる。迎え火、送り火を焚く場所は家の門口や辻、墓の入り口などさまざまである。精霊送りでは、川や海に盆の供物を流すところが多い。

カリゴメ…カリゴメは刈り上げ祝いで、稲刈りの終わりを祝う収穫行事。苗代田の稲3株を残し、刈る前に恵方を拝む。

